インターナショナルスクールにおける音楽の授業が日本の音楽科に示唆するもの

―ISAKの事例をもとに―

安江真由美[1]・松永　洋介[2]

キーワード：インターナショナルスクール，音楽教育，国際バカロレア

1　問題の所在と研究の目的

平成26年11月20日，下村文部科学大臣は，「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」と題した諮問を中央教育審議会に行った。これを受けて，現在，中央教育審議会では今後の日本の教育の方向性についての審議が進みつつある。当然その内容は新しい学習指導要領にも影響を及ぼす。一般的に学習指導要領は約10年ごとに改訂されると言われている。その通例に従えば次期改訂は平成30年度になると考えられる。しかし，小学校への英語の教科としての導入や，道徳の教科化など，教育現場への早急な改革を考えると，平成30年度よりも前倒しになる可能性が高い[3]。

ところでその諮問文の中に次の文章がある。

「新しい時代に必要となる資質•能力の育成に関連して，これまでも，例えば，OECDが提唱するキー•コンピテンシーの育成に関する取組や，論理的思考力や表現力，探究心等を備えた人間育成を目指す国際バカロレアのカリキュラム，ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育（ESD）などの取組が実施されています。（中略）

これらの取組に共通しているのは，ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず，学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い，子供たちがそうした教育のプロセスを通じて，基礎的な知識•技能を習得するとともに，実社会や実生活の中でそれらを活用しながら，自ら課題を発見し，その解決に向けて主体的•協働的に探究し，学びの成果等を表現し，更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点です。

そのために必要な力を子供たちに育むためには，「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと，「どのように学ぶか」という，学びの質や深まりを重視することが必要であり，課題の発見と解決に向けて主体的•協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や，そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。こうした学習・指導方法は，知識•技能を定着させる上でも，また，子供たちの学習意欲を高める上でも効果的であることが，これまでの実践の成果から指摘されています。（後略）」[4]

ここに示された文章が意味するものの一つは，従来のように知識を大量に覚え込んだり，与えられた問題に対して素早く解決したりするような学力ではなく，自ら問題を発見し，解決していけるような学力が求められているということである。またもう一つは，そうした学びの過程においては，自分一人で解決するのではなく，友達と共同しながら解決していくことが求められているということである。

すなわち音楽科においては，従来よく見られた教師が児童生徒を一方的に指導していくようなタイプの授業は成り立たなくなると言うことになる。そうした授業では，児童生徒が何を学んだかが曖昧となり，技能のみが評価される傾向が強いからである。それは必然的に学校外で音楽を学んだ児童生徒が，学校の音楽の授業の中でも活躍することになる。また，そのように活躍する児童生徒が高い評価点を与

---

1 岐阜大学大学院教育学研究科修士課程
2 岐阜大学教育学部音楽教育講座
3 2013年12月28日付産経新聞では，平成30年度を前倒しして改定し，平成28年度より実施すると報道している。
4 文部科学省（2014）「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm（2015.1.5閲覧）

えられるとことになる。これは指導したことに対して評価するという原則から逸脱するものである。

新しい学習指導要領が作成されようとしている現在，音楽科に関しては，時間数のさらなる削減も予想される。それは教科としての英語や道徳の時間をどのようにして捻出するのかという問題とリンクする。このような厳しい状況下で，音楽教育に関わるものは音楽科の存在意義を明確にしなくてはならない。そのためには，児童生徒の教育にとって音楽という教科が必要不可欠であるということを示していく必要がある。それもこれまでのように観念的に「音楽は子どもの情操教育にとって大切だ」あるいは「音楽は子どもの感性を育てるのに欠かせない」と主張するのではなく，なぜそうなのかということを理論的，統計的に示していく必要がある。また特に，今後大きなキーワードとなるであろう「21世紀型学力」における音楽科の位置づけや，授業像も考えていかなくてはならない。

筆者らは海外の様々な音楽科の授業の様子を大学院の授業の中で取り扱う中で，日本の音楽の授業がかなり特殊な形態であることに気づいた[5]。そこで，その解決の手がかりを国際バカロレア（International Baccalaureate，以下IBと表記する）に求めようと考えた。なぜならば，IBでは教育の目的から指導内容，そして評価まで一貫して体系として整備されていると考えたからである。

本論では，IBを実施しているインターナショナルスクールにおける授業の事例をもとに，新しい学習指導要領の方向性を踏まえた授業の在り方を探ることを目的とする。

2　研究の方法

本研究は文献研究と学校見学の２つからなる。

文献研究としては，IBに関わる文献および先行研究から，IBにおける音楽教育の考え方を整理する。

また学校見学ではISAK (International School of Asia, Karuizawa) で行われている授業を対象とした。筆者らは2014年９月４日に学校を訪問した。すでに授業は始まっていたものの，残念ながら音楽の担当教諭はまだ帰国中で会うことができず，音楽の授業についての説明は，ISAKのコーディネーターであるポール・スウィート氏と小林浩子氏から受けた。また，音楽室の見学とそこに掲示されているワークシート類によって，授業の概要を知ることができた。よって授業については聴き取りと生徒の活動を記したワークシートの二面から分析する。

3　IBについて

（1）IBプログラムの種類

IBには二つの側面がある。一つ目は大学入学資格としてのIBである。これはIB認定校が実施するテストによって得た得点によって大学入試の資格を得るものである。もう一つは教育プログラムとしてのIBである。本論文では後者が意味するIBを研究対象とする。

IBには現在４つのプログラムが存在している。１つ目は３歳から12歳を対象とした初等課程プログラム（Primary Years Programme，本文以下PYPと表記する），２つ目は11歳から16歳を対象とした中等課程プラグラム（Middle Years Programme，以下MYP），３つ目は17歳から19歳を対象とした歳大学入試資格取得プログラム（ディプロマ・プログラム，Diploma Programme，以下DP），そして４つ目はIBキャリア関連教育サーティフィケイト（Career-related Certificate，以下IBCC）である。IBCCは大学へ進学しない生徒を対象としたプログラムで，2013年より実施されている。したがってIB認定校では，生徒の進路の希望に応じてDPかIBCCかを選択することになる。

（2）IBの学習者像

IBではすべてのプログラムにおいて目指されている理念を「多様な文化の理解と尊重の精神を通して，より良い，より平和な世界を築くことに貢献する，探究心，知識，思いやりに富んだ若者の育

5 この授業では次の本をテキストとして用いている。
日本学校音楽教育実践学会編（2012），『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較』，音楽之友社

成を目的としています」 と述べている[6]。

そして上記理念のもと，それを実現するための具体的な姿を定めている。それは「10の学習者像（Learner Profile)」と呼ばれている。すなわち，探究する人（Inquirers)，知識のある人（Knowledgeable)，考える人（Thinkers)，コミュニケーションができる人（Communicators)，信念をもつ人（Principled）心を開く人（Open-minded)，思いやりのある人（Caring)，挑戦する人（Risk-takers)，バランスのとれた人（Balanced)，振り返りができる人（Reflective）である。

IBを語るときに留意しなくてはならないことは単なる大学入学資格という側面だけではなく，全人教育という側面をももっているということである。したがってIBでは，教師も保護者も学び成長し続ける学習者であり，上記の学習者像を目指すものと考えられている。

4　IBのカリキュラム

(1) 教師の役割

IBのカリキュラムは日本とは大きく異なっている。

日本では学校教育法に基づいて学習指導要領が定められ，各教科，道徳，総合的な学習の時間，特別活動，外国語活動ごとに目標と学習内容が示されている。

一方IBでは，日本でいう国語や数学などの教科は存在しない。前述したように学習者像が定められ，それに基づいて学習領域がPYP，MYP，DPの各段階で定められている。

また教師の役割も大きく異なる。

日本では教師はどちらかというと「教える人」という意味合いが強い。しかしIBでは，教師はあくまで子どもたちが自発的に学ぶことをサポートする「ファシリテーター（facilitator)」という立場を取る。意味としては「ファシリテーションを専門的に担当する人」のことをいう。 ファシリテーター自身は集団活動そのものに参加せず，あくまで中立的な立場から活動の支援を行うようにする。例えば会議を行う場合，ファシリテーターは議事進行やセッティングなどを担当するが，会議中に自分の意見を述べたり自ら意思決定をしたりすることはない。これにより，利害から離れた客観的な立場から適切なサポートを行う。これはIBの学習が探求学習を中心とするためであり，子どもが自ら学んでいく姿勢を重視するためである。

日本においても生活科や総合的な学習の時間が導入されたときに「教師は支援者だ」という考えが広まったことがあるが，IBではすべての学習に渡ってファシリテーターという立場を取る。

(2) PYP，MYP，DPにおける学問的視点とテーマ

PYP，MYP，DPにはそれぞれ教科に相当する学問的視点が設定されている。そしてそれぞれの学問的視点を構成テーマが設けられている。以下，各段階ごとに説明する。

①PYP（3歳〜12歳）

PYPではカリキュラム・フレームワークを行う。カリキュラム・フレームワークとは，相互に関係のある3つの「質問」と，5つの「基本要素」から成り立っている。

カリキュラムのモデルとなる3つの質問は，「私たちは何を学びたいか」，「私たちは，どうしたら，よい学習ができるか」，「私たちは，どうしたら何を学んだかがわかるか」である。それぞれを言い換えて，「カリキュラム文書」，「カリキュラム実践（授業中)」，「評価カリキュラム」ともいう。

5つの「基本要素」は，「概念」「知識」「技術」「態度」「行動」から成り立っている。これら5つすべてのバランスがとれるようにカリキュラムを組む。

まず，「概念」(Key Concepts) は8つの領域から構成されている。すなわち「Form（形態：それは，どんなものか)」，「Function（機能：それはどうなっているのか。どうやって動くのか)」，

6 非営利教育財団 国際バカロレア機構（2014)，『国際バカロレア（IB）の教育とは？』
ibo.org/ibap/.../japan_what_is_an_ib_education.pdf　(2014.7.31閲覧)

「Causation（原因：それは，どうしてそうなっているのか）」，「Change（変化：それは，どのように変わってきているのか）」，「Connections（関連：それは，他のもの（こと）とどういうつながりがあるのか）」，「Perspectives（見方：どういう考え方（ものの見方）をしているのか）」，「Responsibility（責任：わたしたちがしなければならないことは何か）」，「Reflection（振り返り：どうしたらわかるのか）」である。

概念は学習を計画するときに１つの単元において３つまで使用し，１年間に全ての概念をカバーすることが求められている。

続いて，「知識」（Knowledge）についてであるが，これはいわゆる教科に該当する。IBでは，日本の学校のように，国語，算数，理科，社会といった教科別の授業はなく，「六つの学問的視点」をカリキュラムのなかに組み込むことが定められている。すなわち，(i) 言語的視点，(ii) 社会学的視点，(iii) 数学的視点，(iv) 芸術的視点，(v) 科学的視点，(vi) 体育・道徳的視点である。

この「六つの学問的視点」の上位概念として，「六つのテーマ」が存在する。それは次の6つである。

(i) 自分自身について（Who we are）

(ii) 私たちが置かれている場所や時代について（Where we are in place and time）

(iii) 自己の表現方法について（How we express ourselves）

(iv) すべてのことはどのように機能しているかについて（How the world works）

(v) 社会を体系付ける方法について（How we organize ourselves）

(vi) 地球に共存する術について（Sharing the planet）である。

学校現場では，上記の「六つのテーマ」を探究していくのに必要な知識体系として，「六つの学問的視点」からふさわしいものを選び出し，それらを組み合わせ，教科融合型の学習ユニットを作成する。児童生徒は，１ユニットあたり約６週間，全部で６つのユニットを，１年かけて学ぶ。なお，３歳から５歳の幼児では各学年次または学年ごとに少なくとも４つの単元に取り組む。そのうちの２つは，(i) 自分自身について（Who we are）および (iii) 自己の表現方法について（How we express ourselves）であることが求められている。そしてその１ユニットに対し，セントラルアイディアを設定する。なお，セントラルアイディアは必ず1文で示すことになっている。

次に，「技術（教科を超えたスキル）」（Transdisciplinary Skills）について述べる。これは全部で５つからなる。すなわち「Social Skills（社会的スキル）」，「Research skills（リサーチスキル）」，「Thinking skills（思考スキル）」，「Self-management skills（自己管理スキル）」，「Communication skills（コミュニケーションスキル）」である。

これらは教科を超えて，どの教科でも必要となるスキルである。

第４に「態度」（attitudes）について記す。

態度には，「Appreciation（感謝）」，「Commitment（責任）」，Confidence（自信）」，Cooperation（協力）」，Creativity（創造性）」，Curiosity（好奇心）」，Empathy（共感）」，Enthusiasm（熱意）」，Independence（自立）」，Integrity（誠実）」，Respect（尊敬/尊重）」，Tolerance（寛容）」が挙げられる。

最後に，「行動」（「指導」と「学習」）について述べる。それは，「探究」，「行動」，「振り返り」である。

②MYP（11歳～16歳）

MYPではPYPと比較すると一般的な教科に近い授業が組まれている。

PYPの教科は６教科[7]であるが，MYPでは次の８教科となる。すなわち (i) 第一言語（母国語）(ii) 第二言語（外国語）(iii) 人文科学（歴史や地理など）(iv) サイエンス（生物，物理，化学などの理科的科目）(v) マス（数学）(vi) アート（芸術）⑦体育⑧ITである。

7 「教科」という用語がIBの学習においても適用されるかどうかは検討の余地があるが，坪谷は著書『世界で生きるチカラ』の中で，IBで行われる授業を「教科」としていることからここでもそれに倣って用いる。おそらくIBで行われる授業の各領域を日本の学校の教科に該当するものとして説明するのに適当であると考えたからであろうと推測される。

またPYPと同様にこれらの教科に加え，その上位概念ともいえる「5つのテーマ」が設定されている。それは(a)学習の姿勢，(b)人間の創造性，(c)共同体と奉仕，(d)多様な環境，(e)健康と社会教育である。

MYPにおいても，カリキュラムを設定する際には，これら「5つのテーマ」を中核に「8つの教科」を組み込んだ「教科複合型」であることはPYPと同様である。ただし，MYPでは，子どもたちの人間的成長に伴い，「生徒たちが共同体の一員としての役割や責任を自覚し，他者と共生していく力を養う」ことを念頭に置き，一般的な学習教科だけでなく，学校行事やボランティア活動といった課外活動にも重点を置いているのが，カリキュラムにおけるPYPとの大きな違いである。

③DP（16歳〜19歳）

DPの学習は，日本の普通科の生徒とは違い，理系・文系の区別が無く，分野を横断する学際的な学びが可能である。DPは大学入学の準備コースに当たる。また，教科の枠組みが既存の日本の高校教育の枠組みに近い。

DPには「6つの教科グループ」が存在する。すなわち，(i)言語と文学（母国語，日本の場合は日本語となる），(ii)言語習得（外国語，日本の場合は英語が多い），(iii)個人と社会，(iv)実験科目，(v)数学とコンピューター科学，(vi)芸術または選択科目である。

生徒たちは，上記(i)〜(vi)の教科グループから1科目ずつ選択をする。その際，それらの科目のレベルを「スタンダード（標準）」か「ハイヤー（高度）」にするかも同時に選択する。ただし全体としては，3教科をスタンダードに，3教科をハイヤーにしなければならないというルールがある。

さらにこれらに加えて，次の3つのカリキュラムを受けることが義務付けられている。それは(a)課題論文，(b)知の理論（TOK），(c)課外活動（CAS）である。この3つのカリキュラムはすべて，授業以上に自主性が重んじられる。教師や学校からプログラムを提供されるわけではなく，どんな活動をするのか，そのためのリサーチ，外部機関での活動であればそこへのアクセスなど，すべて自分自身で考え行動しなければならない。

5　IBにおける音楽の授業

音楽はIBでは芸術の領域に入る。すなわち，PYPでは6つの学問的視点の中の「(iv)芸術的視点」，MYPでは7つの教科の中の「(vi)アート（芸術）」，そしてDPでは6つの教科グループの中の「(vi)芸術または選択科目」に含まれる。ただし，「音楽」ではなく「芸術」の中の一つとしての位置づけである。芸術科はビジュァルアーツとパフォーミングアーツからなるが，その中には音楽だけでなく，美術，演劇，フィルム(映画)，ダンスなどが含まれる。したがって，日本のように必修の教科として「音楽」が位置付いているわけではない。またDPにおいては，「(vi)芸術または選択科目」となっており，「選択科目」とは(i)から(v)の中から1科目追加で選択することも可能であるので芸術を選択しないことも可能である。なお，DPでは，先に述べたようにレベルを「スタンダード（標準）」か「ハイヤー（高度）」にするかも選択しなくてはならない。したがって大学入試に求められるIBスコアを考慮したときに，芸術を選択するかどうか，そして内容をスタンダートにするかハイヤーにするかは生徒にとっては大きな問題となることが予想される。

さて，現在のところ，IBに関して音楽教育を対象とした研究には次のものがある。

まず，安江と松永は，「国際バカロレア教育における音楽教育の可能性」と題して，PYPにおける授業プランを提案している[8]。また，伊藤は「国際バカロレアのディプロマ・プログラムにおける音楽の試験分析」と題して，DPにおけるリスニング・テストの内容を調査し，身につける能力を明らかにすることを試みている[9]。しかしこれ以外の研究は管見の限り見つけることはできなかった。

8 安江真由美，松永洋介（2014），「国際バカロレア教育における音楽教育の可能性」，日本学校音楽教育実践学会第19回全国大会（平成26年8月16日，熊本大学）発表資料

9 伊藤友貴（2014），「国際バカロレアのディプロマ・プログラムにおける音楽の試験分析―リスニング・テストを中心に―」，中国四国教育学会第66回大会（平成26年11月16日，広島大学）発表資料

一方，同じ芸術教科の中でも，美術科では小池研二が自身の東京学芸大学附属大泉中学校時代および同中等教育学校時代に行った実践と研究およびその後横浜国立大学にて行っている研究の成果を発表している。彼の研究は，特にMYPを対象としている[10]。

MYP では，教科ごとにガイドブックが発行され，そこにはねらい（aims），目標（objectives），評価についての諸注意等が記されている。ガイドブックはIB の公式な刊行物でありそれを広く公開することにより，プログラム自体の透明性，公共性を高めている。また，ガイドブックは各教科群別に対等な立場で存在しており，このことはIB がそれぞれの教科群を同等な重要性を持つことを示していることに他ならないといえよう。

芸術科のガイドブックでは，ねらいと目標を次のように定めている。以下，小池論文より引用する[11]。

まず，芸術科のねらいについては，「MYP 芸術科の学習のねらいは生徒たちに以下をさせることである」と記され，次の 8 項目が挙げられている。すなわち，(1) 個人的，文化的なアイデンティティーを発展させてきたことや表現してきたことについて，芸術がどのような役割を演じてきたのかについて理解すること，(2) 芸術が時間や文化を越えてどのように進歩し，情報を伝えてきたかを正しく認識すること，(3) 芸術についての知識を持った思慮深い専門家になること，(4) 様々な状況の中で芸術をつくりだすプロセスを経験すること，(5) アイデアを探究し，表現し，伝えること，(6) より有能な（effective ） 学習する人，探究する人，考える人になること，(7) 芸術経験を通して自信や自覚を深めること，(8) 芸術を生涯にわたって学習し楽しむことの価値を認めること，である。

次に目標は，教科を学習した結果，何を生徒が成し遂げられるのかが具体的に示されている。芸術科では目標は 4 つ示されている。すなわち，(1)「A：知識と理解（Knowledge and understanding)」，(2)「B：応用（Application)」，(3)「C：ふり返りと評価（Reflection and evaluation)」，(4)「D:個人的な関与（Personal engagement)」である。この 4 つは独立したものではなく，互いに影響し合っている。またその目標は評価と直接的に関連し，評価規準（Arts assessment criteria）となっている。

6　ISAKにおける音楽の授業

ISAKは小林りんが2014年 8 月に長野県軽井沢町に開校した学校である[12]。日本の教育課程では，中学校と高等学校に該当する。生徒は世界各国から集まり，日本人生徒は全体の約30%である。また，ここでの授業はすべて英語で行われる。

ISAKはインターナショナルスクールであるが，同時に日本の学校法人の認可も受けて，日本の教育課程に基づく教育を行うという，いわゆる一条校でもある[13]。

ISAKの音楽の授業は基本的には問題解決の授業である。

生徒たちは自分たちの興味・関心に基づいてテーマを決める。次に仲間を募集しグループを作る。グループができると，課題をつくって活動を始める。

今回訪問したときに生徒たちの作っていたグループごとの課題と人数はそれぞれ次の通りである。

---

10 小池の研究は次の論文として公表されている。
小池研二 (2009),「国際バカロレア中等教育課程 (MYP) 芸術科についての基礎的研究」,『美術教育学』美術科教育学会誌第30号，pp.191-200
小池研二 (2010),「国際バカロレアMYPにおける鑑賞教育の研究 (3)」,『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学』第12巻，pp.43-61
小池研二 (2011),「国際バカロレア中等課程プログラム (MYP) 芸術科についての基礎的研究 (2)：評価を中心として」,『美術教育学』美術科教育学会誌第32号，pp.149-162

11 ここで小池の訳を引用したのは，小池が用いたのは2000年版のガイドブックであり，筆者らがそれを入手できなかったからである。現在は2009年版が公表されている。
IBO (2009),「MYP Arts guide　For use from January or September 2009」
http://www.elserenoms.org/ourpages/auto/2010/3/8/37052863/MYP%20Arts%20Guide.pdf#search='MYP+Arts+guide+For+use+from+January+or+September+2009'

12 実際には2011年よりサマースクールを開講し，世界各国より生徒を集めて授業を行っている。これがISAK開校の準備段階と考えることができる。その様子は下記サイトに詳しい。
中西未紀，連載「軽井沢にアジアのための全寮制高校を作ります！」「第10回　10カ国31人の子供が共に過ごしたサマースクール2011（前編)」『日経ビジネスオンライン』，2011年08月08日 http://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20110805/221905/?P=2

13 一条校とは，学校教育法第1条に規定された学校のことで，幼稚園，小学校，中学校，高等学校，中等教育学校，特別支援学校，大学，高等専門学校がこれに当たる。専門学校や各種学校はこれに該当しない。インターナショナルスクールの多くは各種学校として扱われる。

「Vocal（歌）」10名，「Composition (Sound recording)（作曲，録音）」7名，「Knowledge of music and synthesization of s new type of musc（音楽の知識，および新しいタイプの音楽を統合）」5名，「Advanced Technology（進歩したテクノロジー）」3名，「Jazz（ジャズ）」3名，「Rock（ロック）」2名，以上6グループ30名である。

したがって，日本のような一斉授業ではなく，各グループがそれぞれの課題を解決するという複数問題並行学習となる。

（1）授業を支えるワークシート

授業に際して生徒は「Personal Assessment Design」と題されたワークシートに自分たちの学習計画を書き込む。（図1）

一人ひとりは技量に応じて「B:Biginner（初心者）」，「I:Interwed（BとAの混合）」，「A:Advaned（熟練）」の3つに分けられ，それぞれのワークシートに「B」「I」「A」の付箋がつけられる。

このワークシートは以下の項目から成り立っている。

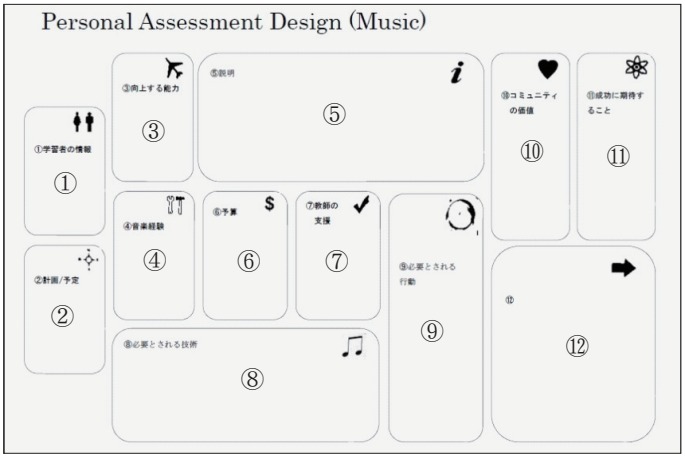

図1　ワークシート

すなわち，①Personal Profile（学習者の情報，自己紹介），②Scenario/Task（計画/予定），③Opportunities（向上する能力），④Experience（これまでの音楽経験），⑤Description（説明），⑥Expenses（予算），⑦Teacher Feedback（教師の支援），⑧New Skills Required（必要とされる技術），⑨New Practices Required（必要とされる行動），⑩Community Value（コミュニティの価値），⑪Wow Factor（成功に期待すること），⑫Retention（維持力）の12の項目である。

（2）ワークシートの実際

生徒は一人ひとりこのワークシートに自分の学習したことを書き込んでいく。

例えばあるグループに属する生徒Aは次のように書いている。なお，氏名や出身国は仮名を用いる。

①Personal Profile

私はB国から来ました。私はすべてのスポーツが好きです。ただしゴルフを除きます。好きなものは，食べること，アニメ，マンガ，ゲームそして音楽です。家族が成功して幸福なのは私にとっては重要なことです。私はロックまたはチルアウトが好きです。

②Scenario/Task

ミックギブソン先生，私たちの技能，才能，そして私たちが成し遂げることを希望するすべてのことを行ったり発展させたりすることを選択するすばらしい機会を私たちに与えてくれました。

私は音楽を聴いたり，ギターを弾いたり，音楽テクニックを披露したりすることが好きです。

③Opportunities

私は自分の音楽的情熱，音楽的技能，音楽鑑賞を発展させせることのできる能力を得ました。

私はよりよく音楽を学び，分析する能力を得ました。

私は新しい楽器を学ぶ能力を得ました。

④Experience

私の音楽的背景は次の通りです。

私は10歳から11歳にかけて2年間ピアノを学びました。また演奏会にも行ったことがあります。

私はしばらくの間ギターを弾いていたが止めてしまいました。しかし今はもう一度弾きたいと熱望

しています。

私の出身校では３年生から８年生まで音楽を履修しなくてはなりませんでした。

⑤Description

私の生活の中の音楽的な部分において，ギターを学ぶことを通して音楽を愛好する生活を続けたい（そして可能であればピアノにも再挑戦したい）。これは，ギターは私に尋常でない感覚をもたらすからであり，またとてもとても（very very）多様性と共通性があり，どこでも演奏可能だからです。これを使って将来可能であればバンドに加わりたいと思います。そして自分自身や他の人々の楽しみのために，そして可能であればテクノロジーを使って作曲した歌と一緒に演奏したいと思います。

⑥Expenses

（試案ですが）音楽編集ソフトとアコースティックギター

⑦Teacher Feedback

（＋）プラス面として，よいアイデアです。

（―）マイナス面として，もっと驚きの要素が必要です。

これに対して「コメントをありがとうございます」との記入があった。

⑧New Skills Required

１つめに，ギターの演奏法を学び，上手に弾きたいです。

２つめに音楽を編集するプログラムの基礎的な知識を得て精通したいです。

３つめに読み，理解，音楽的な要素の分析と鑑賞，楽譜，そして音楽そのものなどすべての分野にわたってもっと上達したいです。

⑨New Practices Required

ギターの通常練習，自己発展のために音楽を演奏したり編集したりする人と会談したい，勤勉で責任を持ち続けたい，音楽技術や音楽の新しい方法を発展させたい

⑩Community Value

適当な機会や環境のもとで私の音楽を用いたいです。もしそれがうまく成し遂げることができれば，ISAKの中だけではなく私の回りのすべての人々を静めたり，リラックスさせたり，励ましたりする何事かを創造することが好きになるでしょう。

⑪Wow Factor

私はより高い質の音楽的多様性を得るために，ギターへの情熱と音楽テクノロジーを結びつけたいです。

人々を楽しませ，いつかは慈善活動を行いたいです。

⑫Retention

私は過去の日々を振り返り，自分の行った選択について後悔するのではなく，満足しています（笑）。

私はなおも技術レベルを維持したいです。そしてできればもっと上達したいです。そしてよりよくなるために努力を続けたいです。そして他の人に対して影響を与えたいです。

これが生徒Ａの記述である。

このカードを通して読み取れることは，まず生徒一人ひとりの音楽の授業に期待することが明記されていることである。例えば生徒Ａの場合はギターに興味を持っていることがワークシートのあらゆるところに散見される。そして「⑤Description」にあるように，「今後もギターを通して音楽を愛好する生活を続けたい」と述べている。

次に，音楽の時間に活動する上で自分に必要なことは何かを意識できるようにしていることである。例えば「⑥Expenses」では必要な物品や予算，「⑧New Skills Required」ではこれから自分が身につけるべき技能を考えて記入している。

三番目に，自分の活動が回りの人々に与える影響について述べていることである。例えば生徒Ａは

「⑩Community Value」で，「適当な機会や環境のもとで私の音楽を用いたい。もしそれがうまく成し遂げることができれば，ISAKの中だけではなく私の回りのすべての人々を静めたり，リラックスさせたり，励ましたりする何事かを創造することが好きになるだろう」と述べている。そのためにはコミュニケーション能力も必要となってくる。

さらに音楽活動が自分にとってどんな意味があるのかを考察していることである。例えば「⑤Description」では「私の生活の中の音楽的な部分において，ギターを学ぶことを通して音楽を愛好する生活を続けたい」と述べている。そしてそれは，ギターは彼にとって「尋常でない感覚をもたらすからである」と述べている。彼はギターの特性を，いろいろな分野で使用でき，共通性があり，どこでも演奏可能があると考えている。それで授業以外でも将来バンドに加わったり，テクノロジーを使って作曲したりしたいと考えている。また，「⑫Retention」では，身につけた技術レベルを維持し，かつもっと上達したいと述べている。そしてそのために努力を続けたいと考えている。

つまり，彼にとっては学校での音楽活動が今後の自分の生活の中にも取り入れたいと願っていることが読み取れる。

以上のように，このワークシートを用いることにより，音楽の授業の計画だけでなく，期待される能力も意識できるようになっていることが特徴である。こうした学習は，日本の音楽の授業とは大きく異なっている。日本のように全員一斉に歌を歌ったり，楽器を演奏したりすることはない。しかしそれは学校で音楽を行うことに対する学習指導要領とIBガイドブックとの違いであり，その優劣をここで結論づけることはできない。ただ，どちらが生徒が能動的に活動するかと言えば，後者の方であろうと予測できる。それは生徒が自ら興味・関心を持って活動せざるを得ない状況におかれるためであり，またそのための自由が保障されているからである。

7　日本でIB教育を行う際の課題

岩崎は日本でIB教育の導入への課題は何かという質問に次のように述べている。「誰もが受けられるプログラムではない点だ。とにかく精神的な強さが必要になる。現在は英語で実施するのでなおさらだが，たとえ日本語で実施されるようになっても，相当量の課題をやり抜く力が求められ，時間管理がきちんとできないと脱落してしまう。少数のトップエリートのための教育だとは言わないが，やはり大学でアカデミックに学ぶための準備教育だ」[14]。

また「知識量は日本の教育の方が多く，知識をある程度補う必要がある。逆に言えば，高度な学びを必要としてないなら，日本式に知識を身に着けた方が良いとも言える」 とも語っている[15]。

ここに日本でIB教育を行う場合の課題が浮き彫りにされている。

まず前者に関しては，不透明な21世紀を生き抜くための精神的強さがつけられるという点で必要となる力であろうといえよう。しかし，脱落した生徒への精神的・身体的ケアはどうするのかが，新しい課題になってくると考えられる。

また後者に関しては，現在はIBCCが作られているが，大学へ進学することに重きを置く価値観がある日本の中で，どのようにこれを適用していくかは今後十分に検討する必要がある。

そうした中でISAKの音楽の授業が日本の音楽教育に示唆するものは，生徒の興味・関心に基づいて学習活動を進める中で，音楽的な知識，技能，能力を身につけさせるためにはどのような学習計画を構成すればよいのかということであると考える。

今回は実際の授業を見学することができず，生徒一人ひとりの活動の様子からさらに詳細な意識を得ることはできなかった。また一人ひとりの音楽的な能力の伸張についても継続的な観察ができれば

14 讀賣新聞連載，『教育ルネサンス「国際バカロレア」』第10回　2012．10.13日付に掲載された岩崎久美子（国立教育政策研究所総括研究官）へのインタビューによる。
15 同上

と考えている。それらを今後の課題としたい。

謝辞

本研究にあたり，快く学校見学を許可し，また取材に応じてくださったISAKの小林浩子氏，ポール・スウィート（Paul Sweet）氏に深くお礼申し上げ，紙上より感謝の意を表させていただきます。

参考文献

大迫弘和（2013），『国際バカロレア入門』，学芸みらい社
大迫弘和（2014），『国際バカロレアを知るために』，水王舎
国際バカロレア機構（2014），『国際バカロレア（IB）の教育とは？』
国際バカロレア機構（2014），『プログラムの基準と実践要綱』
小林りん（2014），『不完全なリーダーが，意外と強い。』，KADOKAWA/角川書店
小林りん（2014），「始動した『スーパーハイスクール』未来のチェンジメーカーは軽井沢で育つ」，『フォーブスジャパン』2014年10月号，　プレジデント社
坪谷ニュウエル郁子（2014），『世界で生きるチカラ』，ダイヤモンド社

参考ウェブサイト

小林りん，「突破する力」No62，『朝日新聞Globe』
http://globe.asahi.com/breakthrough/110821/01_01.html（2015.1.6アクセス確認）
小林りん×滝川クリステル　スペシャル対談，『WEB GOETHE』
Redefining The JOB Special Vol.18
http://goethe.nikkei.co.jp/serialization/takigawa/120209/（2015.1.6アクセス確認）
小林りん，「『ISAK』が求める生徒像とは〜小林りん氏に聞く」，『eduview』
http://eduview.jp/?p=1369（2015.1.6アクセス確認）
笹川かおり，「小林りんさん『世界を変えるアジアのリーダーを』」，「軽井沢に世界中の子供があつまる高校をつくる」
『The Huffington Post』Woman's Story　2013年10月25日（2015.1.6アクセス確認）
http://www.huffingtonpost.jp/2013/10/24/lin-kobayashi-isak-womans-story_n_4154183.html （2015.1.6アクセス確認）
笹川かおり，「小林りんさん『2週間で子供は変わる』」，「ISAKサマースクール 軽井沢に全寮制の学校をつくる」
『The Huffington Post』Woman's Story　2013年10月28日
http://www.huffingtonpost.jp/2013/10/27/lin-kobayashi-isak-womans-story2_n_4168648.html（2015.1.6アクセス確認）
「リレーエッセイ」Vol.82あなたにとって「仕事・働くこと」とは？」オデッセイ
http://www.odyssey-com.co.jp/essay/essay82.html（2015.1.6アクセス確認）
中西未紀，「軽井沢にアジアのための全寮制高校を作ります！」
「“学校の主役”第一期生49人がやってきた　第30回15カ国・地域から集まった生徒が受ける刺激」
『日経ビジネスオンライン』，2014年９月８日（月）
http://business.nikkeibp.co.jp/article/person/20130724/251498/?rt=nocnt（2015.1.6アクセス確認）
中西未紀，軽井沢にアジアのための全寮制高校を作ります！
「“仕事がしやすい”同士では成果が出ない？第29回　ダイバーシティの難しさと秘めたるパワー」
『日経ビジネスオンライン』，2014年７月14日
http://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20140709/268391/?author（2015.1.6アクセス確認）

参考テレビ放送

「教育で世界を変える！〜ゼロから学校立ち上げた超異色39歳〜」
『カンブリア宮殿』テレビ東京，2014年10月23日放送
http://www.tv-tokyo.co.jp/cambria/backnumber/20141023.html